詠草

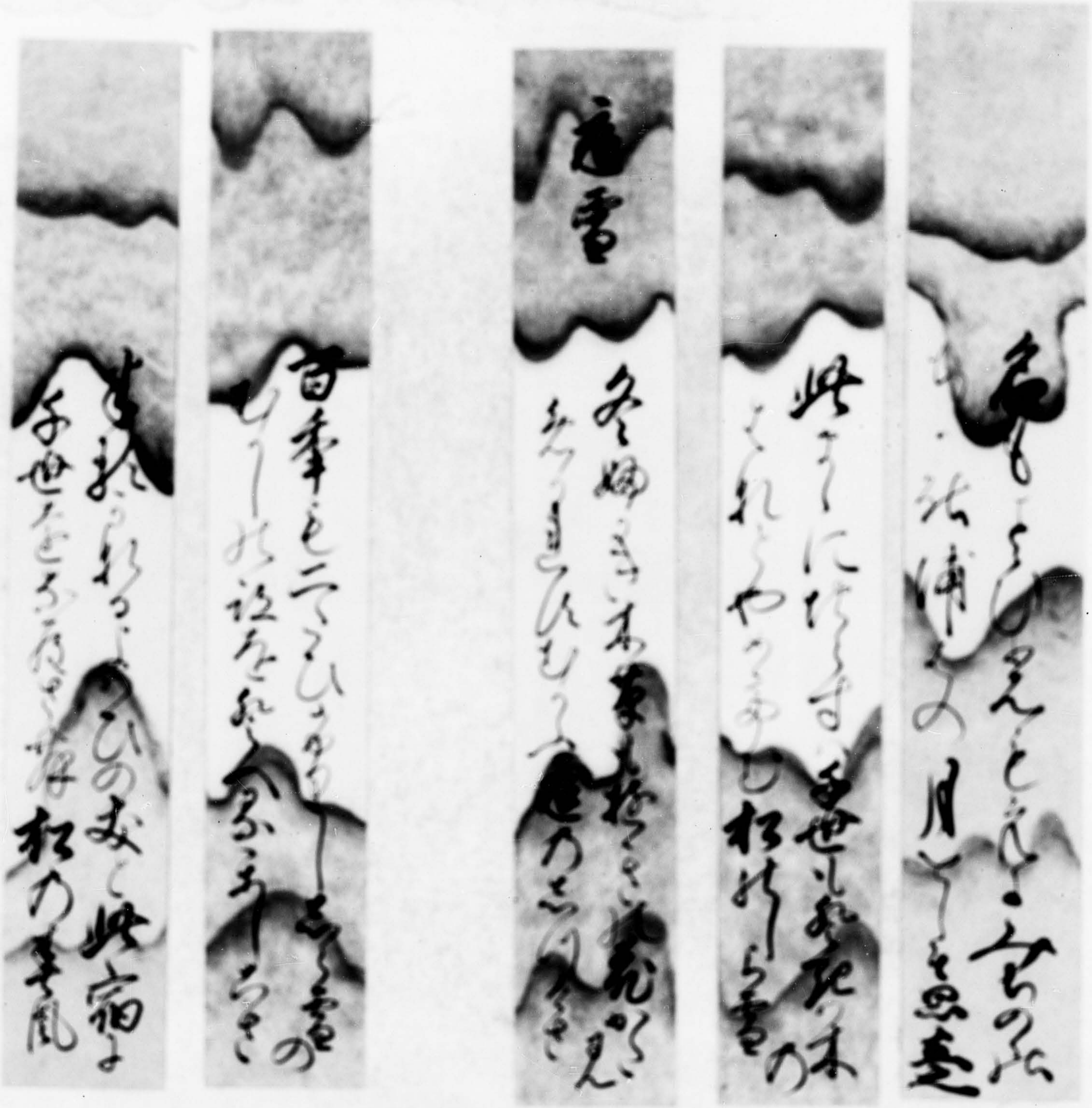
御詠草

常[illegible]院様

御筆

740

9


遠雪

泰崇公の一めくりの忌に
なりけるとしに

はかなくもすきぬる月日めくりきて
涙のいまもたえぬ袂を
あらまし人の今日ても思はれて
難波のつゆらんやとそ思ふよ
ちらぬ花哀つくつくと思ひを
思ひ出る身なきわかれのこと
ゆく行て心はとも哉
我さへ身のつかのまの世のあはれ世に
かく法れてんなすらん物を
かく法文の形の為とて申
無量寿経を書しるし
をかしくも身とて流さ
めくりの道をなさんとて
利立つりくへかくてし
千世まかせといわましかはすき文の
ぬれのみたにとておもつれしき
思ひ身侍る候法覆らかる
ゆうれ

雲井まで咲く風の音信も
よその月はりの秋やつれしま
清七半助より

[illegible]見し日数ハかさなれとも流れと
のこ[illegible]も[illegible]の瀬たえ里けり

九州大學圖書印

福子

睦月清光始日

よろこひ

天津戸のあけてむかふる

ことしの日の光まちえて

海山ある

ゆくすゑ長くとは

わか雲井のためしをそへつ

いかきむとやらん

年内立春

伊勢のやし華まちそて

あらたまれとしふ二ひ

先にさかむとし

除夜 手

鐘の音にとしは暮ぬとつく

ともし火のかけもむかしもひとつかさなる

東にあすは春をとしを

早春雪と

きのふまて春とも見えぬ雪よ

春霞のたのめとゝそく

雪はけりけり

九州大學圖書印

睦月三日志とひさき
松むかふとし中

志と語音にかよへる妻の
松風の峰ひとし和の
志つ梅ぞもひさり

福子

六

九州大學圖書印

年内立春

冬なから雪はあれとも（み）
のふはきて雪ひかとめくる
春の山端

寒鶯

はきとひ又春はなすゝろ
たけゝ山深中に鶯こえて

年のうちも
春の雪の降ける
かすみこそれもこれ

道のとくへてまゆ

九州大學圖書印

福子

試筆

はる日の光うらゝにあまを
うけて
あふのとのねの春のまつ
かな
春行とへまさるゝ和歌の風
けさうちこゝろふ波の花

元日試筆

明ぬる空に年もひとよも山
春
ゆきしかとある上於のこと
さい
天のとに明そむるより長閑
なる
はるの光はるゝにうらし

元日に年二たをみく

はしら地山ふるのいの世の春
の
宇しきをみそかなる年
の松

睦月はいわちの日よ増
し
わかく隊春の光やおもの
こと
千里のめのもかけつらん
あふわい太の春の時を
えそ
降いそもき雨もとけき
やよいの室のまけるかな
睦月三日例の志を譲かた

おなじ中

いはひおくれとおもしい明もとのそれ

いましかの元ある春そへそまき

年内立春

冬籠る雲のあなたハ春の
さそ

梅さきもかゝる岩尾山端

陰り行し雪のいらんにも春
きさねと

かりふる色の先すゝむと紀

あらとしん春立る白梅

花咲もしめやけ也へ

年のうちにもや咲かそ仏
ふるさ

年前にかゝ法ね宿の梅かえ

年のうちに春立る日

指折る心し此日数もつもりや

あふわ春の立也とおもへハ

伊とつやも霧の舞の岩
いち中

こし此年に春ハ見えたり

元日試筆

元日試筆

一葉のくさゝの朝日のひかりさへ
くもりなき世の春や立らん
きみも我もゆたかなるさゝれ
てらん
神代のまゝ礼春の光を

立春

としの海ちさとをこめてく
くる春も
ゆふはさらし光のかけうつるらし
朱雀もそらし軒しも雲の
のとかさん
霞の立ちもつゝもかせくれを

雨中立春

竹も木もうるほふちゝの
春小雨
なとゝいふしむる面かゝとなれ
わきてそえて野山もふかきそ
うるふらん
春くりもこの面のかすみに

早春

河の孫の一葉をとしの
降りて
あさくいつる難波えの春
都わしきかの光を一葉
あまねて
やはらけむる春のの風

早春雪

深山も雪もまた消ぬゆきの花
のこる氷ともにとけぬかも
梓弓のこるさむさはゆきにして
あはくる雪を花とこそみれ

鶯告春女

深山の紀重ねつけまさる うくひすの
初の花よりや萬代のとも
みよしのゝみちのみねの よるをも
こゑも聞えよ春の鶯

若菜

はる野の雪まのわかなつむ とく
のへにはつきの春の詠め

霞知春

草はみなまださかりなる こゝろのみに
あらたしきやよりかゝる らん
立つ霞春はみなやへかさねたる
そのかのふる霧の舞

春到管弦中

はるはまた春をかはしてのその
志たは梅に咲くまゝに鶯の声
かけにあをやきも人和らく

君か代は
はと宿れ春をかれしくゑの

しら梅にまつ鶯の声
折ふしあはせてしらへ和らく
いと竹に
松か枝の風の吹くしらへし

青柳の
青柳のいとよりかけて
苗竹の
しらへもゆふきし春のつま風
吹つゝ風のしらへもはるかや
まふとき はるかぬいと竹の声

幽栖春到
世の中のほけのあとにたの
たのもしき
荒とめかいふる春のつま風
はるとも志らてそよせる柴の
とふ
まつ苔むしるもさすひとの
声

霞添山色
さほ姫のかさみの衣にち
そひて
春ひかひの志るきし山かな
はるらぬ花さかりまれ山も
たれ
かさみて春れ色いつえたり

霞隔社頭
やまさくら花ものたに深めて
と
霧のさかつらかれ玉垣

みよし山春乃光のけふしめて
けふまたるゝ清かむ神垣

朝鶯

けさの雪朝ねとくらん谷の戸を
いでしとやなく里の鶯

春霞たちそめしより朝ごとに
まさりつゝなく鶯の声

子日

うらゝかに日もとしも春や吉
ちよふるねの松ひきて

春雨

青柳のいとゝもみどりにけふぞ
ふりそむる春雨

棹姫のみなたれ衣のそらさえ
ゆく色もてけふぞ降らん

梅風

香のみ袖袂にうつして　さく梅の
なれそといへるもの春風

風揺白梅乃朶

白雪への梅の立枝の月の
ひかりも

さそひくる春のさよ風
霞めるも匂ひかな

白妙の梅の立枝の月の いろも

さそはれにかへ春のさよ風
雪のいろにほふ枝ふけても 消のこる
かゝりおほふさきし梅のさかり

柳先花

春柳のいとみれみとりに さく 花の
おしまきぬそへてなかめむ

夜帰雁

影をみて雁はとまらぬよそを いつと毎
春くれはあるや霜やかへさん
咲花のたもとやかをるはるの よの
やよひあやなくかへる雁金

雪消成水

春の日に高根のこ雪解けて 河
みつさきぬるは谷河のしかし
志かはなれともにをへて 春のうれ
わかれとても雪のきえ水

湖上春雪

春の海のふかきしのの 年月のみを
ゆきしはすけは志かの海つら
見渡せは雪かれ海はしらし 心を

かとみをしめてあつ雪の降

待春月

冬ごもり雲のまよひもさえて　ほのかすく
かきわかる夜の月ならしそ行

野径雉

若草の川のやこゝろとたち　ほのかに声
ゆきゝの人に我を知らなむ也

沢雲雀

かきわけ沢の水も新らしけれ　二声
くれはのふかみのかくれ也
子どもの春にはすゝ新しき　みえの里
あれの志ほりの人の沢水

庵前鶯

原は雪かきくれて雪ぞ降りつもる
のふかのきもれさとれくと出まる
ちらぬれはにたれは鶯の声ぞ
こうれかぬ梅をわかまひさしんかな

庭松春久

冬すゝま御の雲の枝さしげき
ゆくよろづ代の春や　うつさ住せむ

みとりに人春とかされて　庭の松かは

いくよろつ代の春や
　うつさ拾世

みとりにの春とかさねて　庭の松に
幾年かうかぬ松風の声

野遊絲

かげろふ草のみとりにゆらめく
ちる環のすゑ雲はいとゆふ
きぬくとかさなる夕日のかげ

あさみや柳の春のいとゆふ

野外遊絲

えらまれ草のみとりにおりつゝ
ちえろふるる春のいとゆふ
環の人しらぬいとゆふそのさゆく
かとかぶの人もやそむらん

野外春駒

ゆきまは草のいとはかなのけしき
心えぬんさくうつさらあま嶋
松里とゆて小松の路や
のへの草の色はおひくらん

山路雉

春ゆく岸やかのへのかゝひち
はさらひちえて幾とせゆたかなり

吉野人のゆきゝとかれし ありてとく
かさ山陰の幾ゝ次河辺
もれのまんふの移ゝ桜
たゝ河のきとつふきと

同
吉野くわさかぬ楷手 志かもわさと
花の香あかる春の山かと
以の年花手つくを今ちち とて
ほのかさくると鶴りら母

糸桜

さほ姫のかふの法けの ひとまて
世をふ風の手にまかすし
のとけれてれし柳のいと桜
あをやきたる桜の春風

八重桜

同
春深こえし人の花の比わ うつた
や色咲ゝ法る分そえすも花
今も桜の暮にわせ花の盛へさ らう
那らの昔九重やあかへ今

花有遅速

生ゆることいへやくもとうくも 咲めて

さか楽のちゝ花のいらむ

同
散かゝる木陰は雪の深き きまて

春雨とつハやくもとかくれ
咲かめて

さいか梨のゝ花のいろや
若葉かゝる本陰ハ雪の宿
きえて
面かけを嶺の花の白雲

毎春花為約

春ごとの契もかれと山の宿
さ花白妙の色そめせね

峯の花みなさかりの
さくら花
若の花盛書く萬代の春

花時鞍馬多

桜も山も花さかりなる此の
この鞍ハ
ゆきかへる西のあしとゝめて
桜さく山里志ふかりしくらまも駒
なれて
梅のよりしら花春の山里

春月

春雨風もやゝ吹ちりて出宗
なる
霞のそこにかすむ月影
さやかなる梅わたりも桜のあまた
さも
いかにみ春さらぬ春夜の月

山梨花

峯たかく咲ていつくかめて
月雪の

おもひけみとる山なすしの花
おく深き谷には雪とけふと
咲りにほふる山すその花

三月三日

けふそ三千歳のみのはな月　うつもふ
おひをすゝむる桃の盃
汲かはすやよひのはしめの杯に　あひて
紅ふかき桃の花の色そあたらしき

桃花浮水上

うつりかふ花の上の江　とふ事
なかの流にはなを枕なる
水ふかくうつれる色の花ことに花
行さきの花ものこる増るらし

春日遅

難波山遠き里まて暮て帰
春の日は春の日くらし
花に立やよひの末の山里へ
行まて春日そくらしつゝ花なる

雨中暮

かれつゝも青ねてゆく川なむ　ともれさく
春ハを紫のさくれの雨

なれつゝも志ねてや河なむ
をられさく

春は野辺ゆくゝさくれの面

野径菫

ゆきゝにも先ふまれなく
とられ咲
野をとおりつゝしゆくみちにそ摘

樵路躑躅

生柴たくいろもやまふ山への
やとむ岩根にはもえ清く
は
咲清く
いも枝のた
一枝を
おりまし木にそへてかへる山人

池藤

くもりなき池のみぎはに影
見えそ
ちさとの池水に写る藤波
ゆくとも池
匂ともみかく春はゆくとも池
こゝ水
かゝるをとゞめよ岸の藤なみ

暮春藤

藤浪のかゝらはのこれ春をいくれて
ゆく
来る名残かなと何か思ふ
顧
影うつる池の藤浪うちなびく
章
ありとみえける春の行衛を

春衣

花乃香八家のむつのむねと
よるかけ出るも八春風そ吹
さ保姫や花八家香に染ぬらん
霞をねやき八春の夜毛

春神祇

榊葉にかさしし代世々の春
かむことも何の姫花のしらゆふ

あつれとや神もみるらん
みつき山乃春八明かの

寄花恋

わすれやかつ風のさそふ花
かさね成りの人のこゝろへ

ふかき春のあしたの
人のとこの花そはまたき

春恋

わかのやかふれの雲も春
立居てもその中そいまさき

花とわれ人をきもにすて梅と
つかのねかし梅思ひ頃毛

九州大學圖書印

首夏朝

春のやよひもはてし今朝つゆに
なれしをつの葉の風ぞ涼しき

首夏風

花の香はなれ衣はあつきやと　きのふぬ
うすき袂に風ぞまづかよふ

閑首夏

見し春の霞もいつしか法の庭　こゑもなく
夜ぶかくかよふ逢坂の山

籠中更衣

とりかへしころもをきぬる夜半の衣　きぬと
かをるの袖も風ぞ涼しき

新樹

しら雲とみしはいつとかすぐれぬる　をとめて
みどりの空に青葉はならぬ
花まつの姫子のあはせつゝむかし　春くれて
たちわかれぬる庭の桜木

峯修苑

奥山のきゝを山路も思ひきや
わけこしみち花のとこそとひ

夜卯花

名もしらぬ谷の流れの里のかきね
月のよことに光そふらし
判 雪ならはとしもいはす卯花の
かゝる程もかねてすむ月影

賀茂祭

みたらしの水に千世とそいのるなる もろ人の
末のこゝろにかけてそめそかし
判云 あふひとりけし事
幾ころの雲井すらはあふさか
まりもかけののなくはかり

時鳥 判云
まれをねらひしにやへやか 判をはる
人のはあつまりとりけらして
判 花にも勝れるにや 判云
人つるの一声も歎
あてつゝのねにやりたれは
判云今のさらに西より花
月のこゝちしやはらいたり

判云

東ゆくるさ月の雨そ降つゝ

あさくらやさ月の雨もはれ隙[illegible]
あふきまとかれる山郭公
更けし夜ねさめなれは時鳥
まちえてや[illegible]し初音すなと

橋

雨きらく露のまじの風さそひて
すゞしさや[illegible]宿の橋
思ひあし世々に昔の跡にも
まれなる苑の香にもあらし

閑居蘆橋

宿かりつふ橋のうへ和ふ日も
人のとひこぬやとにかくれ
涼しさや独すゝむる秋の夜
春の梅ふ袖とよる橋

早苗多

[illegible]日々[illegible]田子のとる苗に
[illegible]の[illegible]みなれ
紬の[illegible]
いそもとな小田の早苗

標誰家

かりねの宿とおもへはむさし野の
浦ふかきちの中の島をとふみん
ゐなかすみこゝろひてもみつや名誉よ
あふちかへ岩越のはまをせ

湖辺五月雨

打みたれ山影見んかりこそしれ　うきされて
日数ふる五月のさみたれの浦
かゝる影こぬうきれさみたれ
いつすのみやりの月の影見ん

五月雨晴

かきくもりし五月の雨の雲消　はれて
まれなり持ちの夕月の影

水鶏何方

きて人をたゝくもかしかと　たゝくらん
芦の門とそのたゝく水鶏そ

暁水鶏

打つけ残りの月のよすかに有明の
月かゝるかけもまつ成らん

朝水宝

朝の嶺しらむさしむるの山　こきゐゆく

なにはぬかたとえこゝにかゝる浪
明月をとゞにおゐては世しをゆかい

朝霞しもむすびしもろの山 うすもや

なほ川は清くながれて出る瀬も
秋をこそ立よる袖もさゆる まで
さも世に涼しくなる風を夜 なるかな

夕立色

時のまに出すさそふ風くもに 雲の
よそに来ぬ夕立の空ながら
たちかへれともやるもぬるの中空の
名もしばしさしの小露もたまちらす

夏月如穐

まつ陰ぞ池小萩にもとかれ 虫の音と
梢ひらやまの庭の月影
明やらぬまのにそ吹越す月かなと
すゞしさ秋をかよふけそらに

雨中瞿麦

露おもたにたどりし夕の雨の うちに
なでしこの花ぞおきわぬる絵
降雨も撫子ぞよ咲そめて
いろそへ様なぞらし庭の花

蛍火穐近

小笹にも秋ちかき頃の玉すれなる

艸葉にもゝろき秋来の螢ハ
むら螢その思ひのもえこえん
けふも行末ハ梶風やたり

山陰橋川

都かね河月を行しの山陰 さ
すゞ娘る夏の里影を涼 そふ
ちるゝつ橋を見よみすし 第りとの
あのはまし月を岸にて〻

岩野納涼

元にそふあゝの葉あかく とし川ハ
梶ことのわみ川の濱て梶
吹風ハそし 北秋の有とへ川
波のいちはやて夏をとる〻涼ん

貴賤夏秡

みそ紀河かつ紀つやしき 祓かとの
御うても波ゆすの寺大祓さ
賀茂河や祓をとくの こうさき川
おすなる社ハ涼ん

夏古寺

きりを山花の稍ハ青葉かし 一筆
涼しく日を入れの鐘

ちりても山花の梢ハ春深し　一申

涼しくもひゞき入相の鐘
夏はよも涼しかりけり松山の
下このはのあふむ月かげこそ

夏眺望

かすみわたる月のなかあたり
波あそ清くあさ氷漁火

夏夢

かりの枕のねところこのはなにも夜のまれ
みもそね夢のゆめのさめがたし
青ばなのつねの錦をうらし絶て
ねがふとも花のうつゝのねの夢

夏聲

きとめ子この木の根のねより千町田
鳴きつるひてふ萩苗
夏山の木の下かげのたゝこの夕露
なきさし河蝉の聲そ涼しき

九州大學圖書印

早梶の哥を

まねかすや扇の風に先ちらく
もやとゝさそめし梶の白露

梶の葉にゆかりわけきは萩のまふ
あきくる風も音たてそなわ

七夕月

夕月夜妹背川のわたしはあつまれ
なまとつ秋も待ちかなむ
河の星の心のくさしもあまて
光清しまよ夕月の歌

七夕雲

銀河あまひは梯のゆくをそこ
わたわたといふく雲のうちを橋
夕暮に立わる雲やかわ船の
ちゝるとはくすのくて成らん

七夕風

天河つらわといふく舟出よい
ゆりへふうされ風や吹らん
久方のあさ川風吹らしそく
まくしくり法る星合の歌

七夕露

よれつるのかさしの露の玉かつら
幾秋かもとて契なるらん
むすひおく露のひとよの草まくら
とられふくまや思ふらむ

七夕霧

秋立ていく日もあらね中にある星の
ちきり年川辺にたなひく霧
涼しさは秋霧わたるかつ星の
ちへのみさへやへたてはつらん

七夕雨

わし合の雲のかよひちにふる雨
あまよひのわかれに秋の村雨
ちかふつる今宵の雲になれぬをあたなかれ
涙そふ宵の雨もさそふらし

七夕煙

川し合のそらにむかふ紀のみ
なよ星をとつる白ささよ風
あかのつきのあさきも露ゝ兼玉かや
かよ星の波のたちしかわらん

七夕別

天の川わたし七夜のかさま

寄る星の波の[illegible]らん

七夕朝

天の河せしれ渡りの[illegible]よ あまそて
みやまきせたに人あらし泊

鳥鵲成橋

世々かさて星の契よ うれしきは
よ契もの橋をこはむ一夜
もろ枝のかと契とみをそ 相合の
そらにのまてるかさゝぎの橋

寄七夕懐旧

鵲のはしこそむてゝ銀河
おもへいにしへ昔の[illegible]
抄しあらん人あらの波にかくらん
やそのの渡の名のとかの枝て

橋のなかの礼

星合の浜のみなかは名に 知る
行きし秋かたの礼月かのころや
おもふ星の心のうちまて なき
橋のすわの礼夕月のかと

二星契久

幾世なの行かへりてとも あふせとの

たのしさや松の契ならん
あまつをとめの羽衣幾世に
ちとせ経しをしも百合の秋
松しも庭の草花の咲みちて
露かゝるむしろやを甫し　松合の
松まれにあひくる夜のつらく

幽栖擣衣

松くらハの人かともわれしあき　ちよの
露のやとわれ秋のくれかな
なれしよの風のおと忍て秋　このねと
ひとハまろし松のつきて
なへて世の音信とていつさ　風と来
おとろくを法の秋のつ風

初秋見月

なにくれと秋の心ひさを山端
かねのしたるみの月の影
擣ハまさ河の絶すつゝ脂　月や
かたしれのむつしの哉らん

深夜砧

更かくる枕に吹風の音信

おさ深き衆の菊そ驚く
吹し

墨江の松の吹風の音信て

あまつ深き森の葉そ驚かし

嘆へし

まさ深き秋の夜そ露ける
咲志ほる夕しけれと深き　よそ
折もれをそふ荻の風

槿未開

咲あんもあやいのふと植しおか
ちる花のは露の朝顔
咲花を待し程もいつやあ志のめの
暮れもちわるあさかおの花
つらさ

蛩声欲枯

みかさへやのそ枯なんとの月
秋への草葉へかり思ひ成り

女郎花

夕されは野くのへあさ女郎花
露
やどかれし秋風の秋のよの月

吹風もかえて花こそ　けの
を惜む葉の露に月そうつる

月前遠望

月清し秋なしけふ海の面
あまのかはねの浪の

ますゝしき秋の夕暮をしらるゝ
吹しほる夕しほれと涼しき よそ
何しれをそよぐ萩の上風

槿未開

咲あんまふやいつかと植しより
ちとせんりの露の朝顔 わ
咲かぬ先しはやしはや咲しの めの
露れりちからあさかほの花
つちやく涼まつ咲と めれきん
うち侘てふかく朝顔の花

露知槿

何こゝのとくとしらみを 岸すほと
槿をさし浅茅生の露
あとこゝの外秋ふとゝも秋と ええ申
光ともなき露のしら玉

朝露踏来

露ふかみ涼山の秋の朝ほらけ ひ
木そらの露そそさしそうかね
槿さくさしみつ池の杜の花 きらく
朝のほとりになけふ朝露

螢乎欲枯

みかさへやその枯すんとつらむ
秋への草葉ハうけよとなり

夕女郎花

夕されハ袖をくのへあら女郎花 あき
誰かれの床をさ見かはしくて
清かみれつとみされ物とされ 無し
玉のをのわ紐ゆかる夕露

荻葉風

秋の夜ハすのゆめとのつれなき
おとひなくる荻の葉すも

水邊薄

うちなびく尾花が波も山川の
水も日とりまよふる穐風

角田川まなりの人の中
眺ある尓すゝき河原の夕暮
さ波も渡る小月てうかひなく

浦上待月

うき浪も秋の夜ふかく水の面し
宿るかな月なすことかへて待

秋もやゝ浦のしる沙汰に小
まつ夜のまゝ月の影をしそ待

さゝめかす月なきこそかへへて侍

秋もやゝ半ばのむかし池に小
さゝなみ月の影もしそ侍

深山見月

さえわたる月の影のさえ渡る 〽
みやまれぬ木の影そさひしき

松も紀の木高き影をとゝめ 同
こゝろさえ月そみゆくすゑまて

禁中翫月

雲の上にもなかきよの秋 〽
月もやあそふ九重の庭
千とせ秋月の光とゝ流るや
ことの葉の露の光もさし紀の庭

月前竹露

志きしまのみちのくの家のまことゝも
やとれるこほれぬ秋のよの月
吹風もはらはぬことてそ竹の
末葉の露に月そうつれる

月前遠望

月清く晴てしけふは海の面 同
和歌の浦の浪の演史のまを

夢はやとかとのたきえてくもる唐の
うねをかくれぬ梶のよる月

浦鶴啼月

和哥の浦や月の光をこいはの
波路のあしたかなく帰つる

月影も沼雪にさえてくもるたびの
古のとも渡るかりの浦風

湖月帆路

浦風の檝もはえてや浅月の
いかにかしも知るあかれ海清く

雲霧もはれてさらり月影の
古の里もしける志のた浦風

明月

万けこのる光も檝の言葉とて
揃て更増る月そくまなき

幾秋の花をてらし越さく
記さかての
そこれりあきの花月やさむらん

八月十五夜月集にて

のかやうのたさしあかれを
仏のかあ光はつれの檝あしも

くる梅んとのゝ望月の雲

はしたなる光ハ法の梯　かしこ

くもりなきのゝ望月の光
名もしらぬひみはるとぞ宵の　そゝ今
あきらかにぞ月の光とうれ

八月十五夜

千々のかぶ光をまして今宵　かな
みつ汐出る望のよの月
吾妻のなてしこそみそや　この月の
あけハ千里の外のも照らん
むら雲も払ふ風の吹さそて　なまなかに
いはぞ照る望月の光を
里のあれハ思ひ川もまなか
はしもいつはの法の夢月に　くもへくも
みともむへきよち月の空

後の望月望のよに

宮中まる月のかはらぬ光や　ふ
あまてらす神の梯をさはるし
初なくて嫁の寺も名す　ねく
月の光を二夜となへ思ふ津

十六夜の月を

いさよ船和けも波まつさ　まひの

月もかはらぬ道の遺風

九月十三夜

影うつる新たにも稚玉くしけ
ふたゝひてらす月なりき世
以往の秋をもひの国にも
これのみちらん君なりし歌さえわか
あけふたり古也けへいとも祈さ 御事
あきらけきこその後の月歌

稍傾月

出るかわくまわくみ月影の
なかめすこ増る入りまの空

暁月厭雲

いつの法をきはれ月待ついてむすふ 御心
山端はへと世の雲の空
末むかしも中々にして あをきぬつき
月の光を雲はれつゝ世

寄月祝君

久かたのくもらぬ月と詠儀
きみをすむ御代の歌
千代を

猶きやまする君と中々の露の
光そへて月影の移る

もり露を

槿はやかてまるもあとや露の
おきゐかたにおつる秋露の秀
まれつかに哀のそこと秋露に
又かつへて露はきたれり

槿雨

咲まゝに槿をは花風のに梅む わ
雨たなりゆふ秋の夕籠
虫の音もうつる かまゝつ秋 おかけく
世には[illegible]杖こく 移ろへきそ きりき

竹風

宍もく梅 細くしと おかく風の
末け小竹の葉をみ うさき
咲またなりくそれの流る とし
ならぬ梅 志に絶 風のまよ竹

霧中雁

こゑのみ秀ぬのまく雁は これ
霧はまくれ 嬉しの ひとすち
きさゝの音りや かりると 秋の雁を
まちもつかねて棹に雁の秀

深山雁

とみ秋かまけハこそ河道 催しつ寐
みやこ人秋のゆくゑれやそ
旅風に麻の音おろそ 音は
なゝ殊てもとりし深山高さの 里

秋泊麻

松とむる湊にあくちの麻の 音哉
なとこゝ枕のうきよにそうゝ
浪枕月にうつくとふ浦
志の竹秋そへて浦風ぞ吹

田家秋暁

擣の田の朝霧とこゝに ふえん
へまて月ととも河のはつ音
幾夜ふしつ山田のかゝこに驚 きて
浦さはのそよ秋のよ成つゝ

擣衣

都人もやちの比は志を秋 らし
志賀の山の峯の紀はとち葉
こし小ろ田でみはしき秋霧 の
旅さ浦る山を幾日もふきて

紅葉臨水

おほね川岸の紅葉の浦 よ里
波うつ色の

紅葉流水

おほゐ川岸のもみぢの流し　よ里
波の上に地のよるね日そめきさ
流川ゝ岸の紅葉の流しつゝ
志ばしえだのこれみえかゝりし

雨中九月盡

雨はれちれるよ音のみそね　あきもまた
紅葉のかくしめてと道芝の露
庭の葉とりくばそよ
おとの次こんなのにて法名　まて
はるのゆきふりき庭のしら菊

紅葉恋

思ひやれさらでも秋のまき秋暮　行
月をかくしく袖ハつゆと
折のけの暮にもみえて　心と段の
枕あけゆく紅葉のよは目

秋釋教

世の中山岸のあらし風　東ふきくれ
海られぬ法の舟そふきは
嫁のよはなの北留むての光ひ　心ゆも
ちからこて法の月影

山館竹

山とこも栖うし憂世の呉竹の
よとの葉しけき節事ハ多まされと

紅葉残梢

霜よりも梢ハ梢まよみしもみちの
常えて残るかなるのなとちも

嵐風もるにせ吹てや置とまるの
山の紅葉の色は残るらし

残菊留枝

見し菊の露をハ霜とおきまよひ
なをうけつこそ志て菊は花
うつろのて霜よりも後に残る
菊こそ菊の花の見んありかれ

九州大學圖書印

初冬時雨

一 冬きぬと思ふもやかはるらん
あさけのしくれ深山辺の里

一 みさくもりもしくれしもつゝきて
冬たつ空は気色しるしも きくらくの

初冬嵐

冬きてはむかしも梅のはひを つかれて
よもの嵐の音かはるらむ

時雨更風

さよ深しく松のはやき風 あまそて
志くれ音にはうつりぬる

月前落葉

一 てらしみしよもの木葉を 冬のよの
月に吹ちる岸はなれし

一 冬枯のよの木の葉に没る月影 下リ
ちりはつる木の葉ねも海のうす

一 月にこそ落葉はこれはあれねぬ つかのまの
月に吹きて嵐なるらん

一 関さむことこそ留も照るには限ゝ
月に木葉の宿をうける

落葉深

落くる紀梅の木のまにと ちりしけれ
まちしやいる庭のりこちは
さことものつりぬぬりなる 木はへ
つくひて清りる木枯の庭

落葉有声

梢にはのこらぬものいとのかれ
まとぞりこちかな夜木のまの声

暁更時雨

我ならでたれか音に驚かん ねざめ
清さやの袖ぬる暁の空
吹きよそる嵐とともに村雨の
月さへのこして晴れゆく空

渡時雨

志らし今しられのゆきに狩衣 ぬれ
くる里とつる宇治の川長
風きやこ流のいをのりれて 里
なくらひまて時雨ふらん
雲の波さ川とみちらの時雨 きえて
吹あへとわる川そ

竹間霜

葉のうへもおくらしおもしろや

ながき吹あへぬもみち川せ哉

竹間霜

葉のへを重ねしれりや　あさなさな
たえもなく法の庭のくれ竹
うす日さす日影もさえて山寒み
竹の葉かずの霜ぞ消せぬ

霜埋落葉

落つもる庭の木葉を霜の　下にうづむ
もろくなりぬるみゆる朝霜
庭の面に積るの霜のかくれぬを
たれもみな手とりの朝霜

残菊

神無月霜をかさねて白菊の
うつろふ色や残るらん
一とせは霜の下にて匂ふなり
咲きて白妙菊のひかりも

谷残菊

冬枯のゆきも残りし谷陰の
清き流れに残る白菊
霜寒き谷の下かげの白菊の
残るも惜しき色やのこらむ

霜たゝみしゝ梯をうけおる蔦なりや
あはれなるかゝし岩ね流れ

寒松霜

吹きてはすゑに重ねさらへん冷えそしれ
あさ夕にもの高き深き霜
木枯の吹しきゝ末の重ねとのこと
ひゝきしとくろうとや深くさむ霜

夕残鷹

梯霜にかちなくはいは夕霜の
古木に来れむるに落る鷹達
うつゝ澤なりの手をとられてまよひなん
霜なくくもとゝのゆふれの雪

牧場風

牧人の手のあと移る川のさはく
やとりし鷲まて嵐吹なまり
至へ多き九袖りやいとゝゆきね
かゝる紛れへの為あゝ夕風
牧をと従ニ移る引とくて牧人の
つまとめ袖手さ移る胡くのせ
うつし紛れかさねゝみのことろも

まれゝ程ねある袖手をぬらん

由三直

はらしゆかさおしみのこる雪いろも

きゆく程ぬる雪や袖にきえぬらん

袖雪

降とはらへしられぬ袖の面のまに

ゆきかたのこはまる雪も払ひし

あまりにて消えもみえぬ白雪

松川にこそさんおとにきこゆをふる

雪散風

花なしてちらひあらしの山のたかみ

浦かくすなくる岸のしら雪

待雪訪人

あまのへ問しむ人そまつなきなる

けさ雪ぞ庭のしら雪

ゆくへのいやまされ行日数さへ

梅をかき初まるゆきの山里

ゆくすへも行ぬのふ人もなし

まさるやつもりし木のしら雪

日数まさるのやまの峰ふりて

うつろへ海の庭のしら雪

雪中獣

天人あさは道たる狼海のとさ

松山くも絶や雪にまよふ世
山深こ雪吹ちよふ小東風を
なき影もつもりてやまゝら停る梅ん

雪中眺望

なかの川のうつろね山も川も霞
かこもの行方の雪れこお道
花とは見そ雲ぬたし北山
みをしなみの雪の朝あさ

湖邊松雪

ほのかにしらがの浦風音さえて
雪にうつりかすかにしらむ絶の松

海邊寒雪

しらなみの波の千里に降消さく
雪とやうおる浦の雲原

曉埋火

鳥の音の月かそむきて埋火の
也の名とあとにおむ雲もなし

雪松樹花

志津か松も粉あのねぶ白雪の
花咲くは淺い松の深みこそ

六義まことにちくほそく代に
めぐきの木の

花咲ハ清き世も松の深みとりハ

六種まもるにちくはへて千代に
かさしの来の
花とみてむれん松のしら雪

寒夜聞鶴

子城志てふすの思ひや深き江の
深くもむを猶おほゆるの声
とれくの霜を払ふ稀な鶴の
くすねふかのつと声くもきむかし

家歳暮

有明の花やく月の影さへも
きはみに積る雪しれ暮ぬ
年ふる花きはてともさて一とせも
ひとよふさ身に積る程なれ

季巳歳暮

花のこちふ浦さん日数の末つきて
此すれく新まき春にそれなき

家暮松

東しる御の世ハ一しほの
春のみとりも今ふかやかに
季ほねふくあくもむし霜の緑
はまゆうくたてる松のすゑさへ

惜年

花よこそわかれもをしめ春秋の
かぎりをしらぬ年の別路
ゆくとしハ名残をゝしむ月日の名残さへ
はるかにて頼まし年の暮哉

寒鶯

鶯しはまたぬ春を まつとや鳴も
こゝ鶯なん年を先まつらん 鳴く
去年の雪の梢にきえし 声なし
こゝろから道もかへて
何事ハ春の来て山
春まちやまつて年の内鶯

都寒鶯

雪ふかく春待れの宮古 古も
鶯のことをまちかねて

寒鶯梅

東風の向ふ日まてに いつか年
春を待ひよむ梅の一枝
去年も今猶をしとや雪原 ゆき
かをる梅の白梅梅

冬衆吾

かゝる松のうへに白妙梅うえし

冬 歳暮

関の戸の程明けて花も粧のよゝ

志ものゝさしくる志らきそつむ

幾ひくのさむふ枕手油されとも

なみとめや冬も冬ぬ霧ゝけさ

冬 祝言

松しを紀年と数は千世 うまをて

梅さくやかゝる鶴の毛衣

霜雪けふの庭さるを世は千年 亀ん

菊清のと紀はきゝ何かゝらすし

東しは書にさき

冬河やむさゝ流のたてさ頃

よとみもやらてとゝしは書かき

志もとのゝ中に雪の様

やや鶯とし

東しは今気はよ梅さるの 風すむ日

雪やまの紀の山川ふらん

今はとて書けとゝ九つ鶴 なき

替ゝ代のへ花も志て雪

季周早梅

なにはづの春海にして　登こま留

雪残るかくれぬに咲や梅の花

春志あて見えかくれけり

おりくるあの花橋のゝ花　雪の國丹

除夜

梅くらと待もおしむもとしの内

おしむ年かくれぬ事はすまし道

九州大學圖書印

神恋

いつまてのかみなかみのうへに
禊せしとも人ハしられ
みちのくのしのふの山もしられハい
ゐかさりし小中に流ぬひぬる

寄関恋

逢坂の関のなけきハ道なかく
ゆふつけのとり鳴のくれ
いつとても夏かちハ木隠
さめてなちの浦は流さめ

寄琴恋

かきくしれ契むすひし中絶て
うきおもかけのこまつの松風
思ひあまり志らぬる琴の音と ふかき
かねのハそれとやつらへき

寄笛恋

あまん竹の笛きそいり うきふし
ちゃあまき風も志らへて志への
笛竹のかなしきもとも契て
やまきしゆし志らせきかれとハ きん

寄葉恋

何となく手すさひ梅の葉の
さきひすと
おもひとの葉にかくしれやせん
かきやりし中にも思ひ淋しう
うらめ
筆の中の跡ねんころなりへき

寄山恋

思ひ寄りや忠と山とわかれの深き
のこ
志られぬ中に高きとのわくとも

寄木綿恋

榊葉にかけし志るしの何
中そらの
かけし契り志るしとはみん

同
思ひわふ心のわかも志る梅かな
秋くれとわかる月日とやなかん
わかねふ山の

同
藤のころも海のくまくみの思ひ
うつ郷
まつねふ山の岩かけしらまし

同
与所にてこそ月のあはれは志るらめ
ねかん
我ねふやさしれのすのはし

隣家鶏

おきいてんとひと霞立ねと里
とき
思ひわれや夜をふかきと鳴くなる
隣里の中に居るにふかき
まま

おさまれる世ひ霞かさね里
さきき

ぬれれやしらにて霞を結ぶらん
降雪は里の中にも分るらん峰は
こりまさ峰青そいとし海ちぬ

海邊雲

淡路嶋あとのありかは見えしハ
出てて
やまとの波路の末のうき雲

まつ本かにあまねき比算歳は
ひけて
秋をとりし風のしるべそあらむ

寄鶴祝

幾千とせ君をかぞへて遊ぶ
なる
重ねさする鶴の毛衣

ゆくすゑのまちにし世の契をや
立まふ沢辺に雲の通ひぢ

庭鶴

陰高き御代の松に幾代を
かさねて遊ぶ鶴の毛衣

此宿の庭にもなれて遊ぶなる
の
ふかき水のなかれをゆたかにし

松延齢友

千年の松よりひの友と此宿
と

千世をちきらん松の春風

寄梅祝

春ことに咲やむめの千世経とも

おいせぬ宿のかさし成へし

寄松懐旧

いにし世も思ひそへつるすゑ河

日もくれぬとていそく松か本

九州大學圖書印